

# 吉川広嘉公像と錦帯橋記

東日本建設業保証株式会社  
建設産業図書館  
**江口知秀**  
Tomohide Eguchi

**山** 笑う」という言葉は、春の山が新緑で明るく萌えるさまを表した妙なる日本語であり、曇りや雨模様ではなく、やはり青空のもとでこそ、山はかかと大いに笑う。四月下旬の岩国は、雲一つない晴天にめぐまれた穏やかな陽気で、山のみならず一つひとつの木々も、鳥も、虫も、川も、泳ぐ魚も、河原の石も、そして錦帯橋も声をあげて笑っているかのようだった。

錦帯橋はまったく美しい橋で、山川草木の大笑をそこなうどころか、この橋があるからこそと思えてしまう。三名橋や三奇橋に必ず数えられる日本で最も著名な橋でありながら、美しさや奇をてらって架けられたわけでは決してない。

それが証拠に塗装もされない白木造りで、橋台にも欄干にも余分な装飾はいっさいない。にもかかわらず、なぜこんなにも美しいのだろうか。それはこの橋が、叡智を絞って造られた無駄のない構造美の結晶だからに違いない。同じく三奇橋である木曾の棧や甲斐の猿橋の形も、木や石や土といった自然の材のみをもって、困難な架橋条件を克服するための必然的な結果であり、そうした構造物は風土に溶け込み、自然な美しさを醸し出すものなのだろう。

この名橋の生みの親は、この地を治めた岩国領の

第三代領主である吉川広嘉と伝えられる。岩国吉川家の始祖・吉川広家は、西国の雄・毛利輝元と従兄の間柄であり、もともとは出雲国富田一二万石を治めていた。慶長五（一六〇〇）年の関ヶ原の戦いにおいて、家康につぐ実力者であった毛利輝元は、石田三成によって西軍の大將にかつぎ出されていた。この時、外交手腕にたけた吉川広家は、東軍勝利を確信していたため、家康に内通して主家である毛利家の安堵を取り付ける一方で、戦場では毛利軍の動きを封じて東軍勝利に貢献した。

広家の働きで、毛利家は滅亡の危機をまぬがれたものの、一二〇万石の大藩から、周防・長門三七万石に大減封されてしまった。これ以後、毛利家は吉川家を裏切り者と恨み、幕末にいたるまで一国一城の支藩として決して認めぬ立場をつらぬいた。こうして出雲から岩国三万石へ減封された広家は、大名称であったにもかかわらず、あくまでも毛利家の家臣という屈辱的な扱いをうけることとなった。

ところで、こうした逆境は、得てして名君を生み出す土壌となるようだ。吉川家二代目の広正は、新田開発や紙専売制度を実施して、領内の財政基盤を築き上げた。

寛文三（一六六三）年に三代目領主となった吉川

広嘉は、「三代目は凡庸」というジンクスを覆し、銅山の開発や抄紙業を興す一方で、文化事業にも尽力した。生来身体が弱く、闘病に終始した一生ではあったが、この弱点が錦帯橋誕生の契機となるというすぐれた人物は病名も功名とする運氣があるといえるべきか。広嘉の銅像は、錦帯橋右岸橋詰に建てられており、その横には儒学者・玉乃九華の錦帯橋記もある。

（つづく）



吉川広嘉公像（左奥が錦帯橋記）

【交通】錦帯橋右岸橋詰広場

※碑文の全文は日建連HPに掲載しています。